



天平のひろば

NPO法人平城宮跡サポートネットワーク（NPO平城宮跡）
〒630-8577 奈良市二条町2-9-1 奈良文化財研究所内

2023年3月発行

86号

☎/Fax 0742-34-7713
e-mail : npoheijyou@yahoo.co.jp
http://www.heijyonet.nara.jp

平城宮跡歴史公園ガイド研修会

1月14日 NPO 平城宮跡は、令和4年度歴史公園ガイド研修会をガイド登録者103名〔Ⅰ期生48名、Ⅱ期生27名、Ⅲ期生12名、Ⅳ期生6名、Ⅴ期生10名〕を対象に平城宮いざない館で奈文研、管理センターの協力で実施。奈文研解説ボランティア59名は、資料館講堂でオンライン講習を受講しました。



NPO平城宮跡鈴木浩理事長

最初に NPO 平城宮跡鈴木浩理事長が活動体制の周知事項を説明、続いて管理センターから活動運営上の周知事項を説明、奈文研遺構研究室李暉 AF から「平城宮跡の復原建物の扁額の意匠と構造について」講演、続いて飛鳥歴史公園 出口義治課長が「第一次大極殿院東楼の工事概要について」説明。その後、竹中工務店から東楼の復原工事現場で採寸や屋根の形などの紹介がありました。

研修内容は以下のとおり。

❖ いざない館、復原事業情報館、大極門・東楼の活動体制を説明、歴史公園記念ツアーガイドを3月25日に実施。2月から開館時間が1時間早くなる予定である旨などの説明がありました。



管理センターからガイドへの諸注意

❖ 来館、来園者のご意見箱の投書を紹介し、ガイド活動者は、来館者から“常に見られている”という意識で緊張感をもって、ボランティア活動に従事していただきたいと話されました。



奈文研遺構研究室李暉 AF の講演

❖ 平城宮の主要な建物には建物名を記した扁額を掲げた。東西楼は、中軸線を外れた建物であるため扁額は設置しない方針との説明。

❖ 朱雀門は、大極殿や大極門より、格が下なので木口金具を用いていないとの説明がありました。



飛鳥歴史公園 出口義治課長の講演

❖ 大極殿院の完成後に東楼・西楼が増築されたが、東楼・西楼が居並ぶ荘厳な正面の姿を復原する。

❖ 貴重な出土品、隅木蓋瓦が出土しているので屋根形式は隅木のある寄棟か入母屋づくり。

❖ 復原検討から2階建ての構造で総柱建造物とする。

❖ 通柱の側柱、深い掘立柱から12mを超える側柱が屋根を支える構造。
(編集部)



資材加工場で説明(竹中工務店)

市 大 樹

(大阪大学大学院人文学研究科教授)



第46回歴史文化講座は、1月14日平城宮跡資料館講堂で80名が参加して開催。

都鄙間という言葉を使ったが、鄙は田舎、地方の意味。

7世紀の後半から奈良時代にかけて、中央集権制が進む中、中央政府は地方支配のため地方を「五畿内」「七道」という形で編成した。五畿内は都の近くの5か国、七道は都から大きな道路を整備し、その道沿いの国々を「東海道、東山(せん)道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道」という名称で、今の「北海道」と同様の行政の単位として編成した。各幹線道路は道幅9～12m、可能な限り直線で、側溝が掘られ並木も植えられた。おおむね16kmごとに「駅(うまや)」が設けられ、馬や宿泊施設が置かれ、道そのものは「駅路(えきろ)」といった。東海道は正確には、「東海道駅路の沿道にある国々」ということである。

この道路を通して、人、モノ、情報が行き交った。奈良時代は、現在でも驚く程の数の文書が必要とされ、正倉院文書として残っている「出雲国計会帳」では、中央官庁からの文書「符」、中央官庁への上申書「解(げ)」、各国の間でやり取りされる文書「移」、などの授受の様子がうかがえる。この計会帳などをみながら、文書の伝達・移動をたどってみる。

符は都から出雲国まで16～20日程度で送達されるのが一般的で伝達方法は「専使」「便使」という直送方式もあるが、道の沿道の国毎に使者がリレー方式で送る「通送」という方式が圧倒的多数だった。符を次の国へ送る際には、遊牌(添え状)という移をつける。届けば返抄(受領証)が戻ってくる。

通送などの公的交通は、各国内の郡家(今の市役所にあたる)が担い、馬も備え、中央から使者に提供した。「伝(馬)制」である。また大地震発生など緊急時は、各駅の馬を利用して情報伝達する方式「駅制」をとり、10日前後で出雲へ到着している。

また、都で労役につかせるため送り出した「衛士、

仕丁、火頭」などの要員が逃亡することも多かったようで、その通知や代替要員の送り出しの報告など、緊急対応の様子を示す文書も多い。

文書の種類は多かったが、同じ文書を60数か国に伝える場合、作成するのは五畿内各国と各七道宛の12通だけでよかった。各道は都から順に写しを取りながら、正本は次の国へリレーしていく方式で、七道内はいわば部内伝達。「道」が、中央集権国家の行政単位であることをよく表している。

一方、各国から中央官司へ上申される文書「解」は、直接持参することが原則で、国司らが毎年四度、都へ報告に出向く際に持参したり、駅制を使って送ったりした。また都で行われる「相撲節」に参加する折や、逃亡した「衛士、仕丁、火頭」の代替要員の上京などの際、文書を託したりもした。

公文書を送る時は、確実になければならないので、一つの道を外れないように送るが、実際の人の往来はその通りでなく、例えば都から東山道の国である武蔵、陸奥方面へ行くには、東山道だけを通るのではなく、東山道→東海道→東山道と通る、現在の新幹線ルートの方が実用的な場合もある。原則通りばかりではなく、実際の交通路・手段も選ばれていたと思われる。

(編集部)

第47回平城宮跡歴史文化講座

5月27日13時30分～：平城宮跡資料館講堂

寺崎保広奈良大学名誉教授

「聖武天皇の生涯—その即位まで」

(続いて、第22回通常総会、交流会を開催の予定)

平城宮跡歴史公園開園5周年記念ツアー

平城宮跡をもっと知っていただこうと3月24日から26日までNPO平城宮跡は管理センターと共催。54名の参加者は、いざない館～遣唐使船～朱雀門～大極門～第一次大極殿まで、東楼の見学デッキなどで、2時間コースのウォークを楽しんでいました。



朝堂院から大極殿院を望む(管理センター提供)

好評 平城京 歴史講座

浜本雄司さん(奈良県平城宮跡事業推進室主幹)
が1月14日61名に「平城宮跡歴史公園(県エリア)



の整備について」講演。

古都奈良の歴史的・文化的景観のなかで、平城宮跡の保存と活用を通じて“奈良時代を今に感じる”空間を創出するため、既存施設に加え、新たに建設予定の歴史体験学習館では、朱雀大路東側地区において“飛鳥～奈良時代”の重要な出来事を展示・体験でき、正倉院宝物のレプリカに触れ、往時の国際交流のスケールを体験、華やかな天平文化を学習できるものを、整備する計画をしている。さらに朱雀大路南側地区に広大な平城宮跡歴史公園を身近なものにするため、基本計画に基づき、快適な憩いの場と、くつろげる空間の諸整備を計画している。具体的には、オープンスペースから若草山が遠望でき、往時の条坊道路の遺構表示や、

平城京の形が感じられる休養施設や植栽および便益施設などを整備する。また、周遊観光を促進するためパークモビリティや、広域防災拠点の整備も計画している旨、最新の情報が紹介された。

(編集部)

伊藤旭人さん(奈良博工芸考古学室研究員)が、
2月11日74名を前に「正倉院の仏具を解明する」



を講演。正倉院北倉は、聖武天皇、光明皇后の宝物庫で『国家珍宝帳』に記載される650点と60点の医薬帳が大半を占める。

中倉は、東大寺大仏開眼会にまつわる品、献物几、献物箱など平安時代に勅封。南倉は、東大寺の倉庫で仏具や伎楽面、伎楽装束など明治時代に勅封。華籠や如意、香炉などの仏具、天蓋や幡、華鬘などの荘厳具、楽器などが収められている。

「勅封」と言われるが、倉によって時期が異なる。

南倉宝物の多くは、延喜20年(920年)宣旨により、羅索院阿弥陀堂・薬師堂等にあった「雑物」が羅索院双倉への移動が行われた。天暦4年(950年)

には、同双倉から「正蔵三小蔵端蔵」へ「雑物宝」が移された。これは、羅索院双倉が朽損したことで瓦や建材が崩れ落ちたからと『東大寺要録巻第四』に記されている。

仏具の解明は、収納箱、献物几を基準に検討した。ヒノキより硬い、クラの木にピッタリ収められている。鉄三鈷、素木三鈷箱、金銀絵長花形几は安形几密教法具(金剛杖鈴、金剛杵、金剛盤など)のほか、僧具、供養具、荘厳具、梵鐘など梵音具が、コンパクトに収められていることが窺える。(編集部)

木原明彦さん(奈文研解説ボランティア)が3月11日91名を前に「模型で見る東大寺国建造物の



魅力と匠の技」と題し講演。

東大寺国宝の転害門は切妻、本瓦葺き。創建以来の風雪に耐えた南東隅の柱、“木は育成の方位のまま使え”の教えを紹介。正倉院

正倉は、寄棟、本瓦葺き。桁行33m、梁行9.4mと大きいことが分る。また、校倉は“甲倉”と呼ばれ校木による伸縮など、宝物の保存は日本独特である。

三月堂は、寄棟、本瓦葺き、正堂、礼堂との屋根の取り合いで急勾配となっているが、正堂の屋根はゆったり美しい。

鐘楼は、入母屋造り、26.3tの巨大梵鐘を支える重厚な軸組と、軽快な木組みの対比が見どころ。

大仏殿は、世界最大の寄棟であるが、3000tの大屋根を支える2本の大紅梁、再建を繰り返し、60本の総柱が大きさを表している。

南大門は、二重門で鎌倉時代重源により「大仏様」にて再建。6点の総檜復原模型を見ながら、触れながら匠の技の見どころが感じられた。(編集部)

平城京歴史講座(いざない館)

4月8日：米川裕治(檀考研企画学芸部係長)

「薬師寺東塔の発掘調査」

5月13日：井上さやか(万葉文化館企画研究係長)

「平城京の万葉歌」

6月10日：永澤 拓志(木津川市教育委員会文化

財保護課課長補佐)

「恭仁宮跡について」



奈良時代
柳田明進

1986年富山県生まれ。
2009年東京学芸大学教育学部卒業、同年4月京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程共生文明学専攻入学、2011年3月同修士修了

2014年3月同大学院博士課程修了、同年4月樫考研究員を経て、2016年7月奈文研に就職し、現在に至ります。

遺跡から出土する金属製遺物では、発掘後の展示中に腐食し、学術的な価値が失われることが世界的に問題となっています。柳田さんの研究テーマの一つは、出土金属製遺物をより安全に効率的に保存・管理するシステムを構築することです。その他には、室内実験や遺跡での暴露試験、模擬古墳による実験的な手法を用いて、陸域の遺跡、古墳、海底遺跡での埋蔵時の金属製遺物の腐食を検討し、埋蔵環境がその腐食に及ぼす影響を、体系的に理解しようと試みています。また、鉄製遺物の安定化処置である脱塩法の開発、保管時の腐食機構を検討しています。

これまでは、長崎県松浦市鷹島海底遺跡では発見された「元寇船」の海底調査が印象に残るといいます。また、高松塚古墳やキトラ古墳の壁画の保存に関する調査にも取り組みました。

奈文研が所有するX線CTは、国内の文化財用の装置の中で、最大のX線エネルギーを誇ります。この装置を用いると、金属や分厚い土壌サンプルなどX線が透過しにくい、対象物の撮影が可能になります。これまでも日本全国からX線CTによる文化財の調査が依頼され、近年では銅鐸や、さし銭などの金属製品での調査に携わってきました。

子どもの頃に仏像、お寺などを家族旅行で回る中で、文化財に興味を持つようになりました。一方で、物理や化学などの理系教科が好きであったこともあり、文化財の保存を工学的視点から追求する保存科学の道を選びました。

学生時代は、バドミントンに取り組み、今も趣味としています。
(編集部)

平城宮跡を“楽しむ”人たち

平城宮跡では今年も恒例の梅の木の剪定のほか、生垣・低木の刈り込みが始まりました。

緑の保全部会は「パナソニック松愛会奈良東支部」の活動とともに、平城宮跡での草刈りのサポートを長年実施しています。
(緑の保全部会)



梅の木の剪定

第21回平城宮跡クリーン大会

NPO 平城宮跡は4月15日(土)10時から朱雀門ひろばで“平城宮跡をきれいにしよう”と奈良文化財研究所、平城宮跡管理センター、平城京魅力創造プロジェクト-市が共催、「平城宮跡安全・安心連絡協議会」等、奈良市民走ろう会などの協力で多くの市民が集い、クリーン活動を行います。

参加申し込みフォーマットは下記のとおりです。

<http://www.heijyonet.nara.jp/>

新規会員の募集 楽しいときを平城宮跡で!

〈ボランティア活動 入会お申し込み〉

❖個人が支援/活動。年会費 3000円

❖法人が支援/活動。年会費 10000円

☎/Fax: 0742-34-7713 にご連絡ください。

【記事訂正のお詫び】

85号掲載の石川一雄さんは、石田一雄さんの表記誤り、訂正してお詫び申し上げます。(広報部長)

編集後記

平城宮跡の夜明けとともに太極拳、野鳥の観察と多様な人々で賑わっています。オギの天日干しは、眺望絶佳で遠い昔を思い起こします。
(萱鼠)